中部大学大学院　国際人間学研究科レポート

2019 Vol.15 GLOCAL

Forum

■日本語のおいしさ表現と共感覚 ―― 武藤彩加
■「外国人」から考える15世紀のロンドン ―― 佐々井真知

Notes

■日影丈吉『泥汽車』を読む ―― 梶原大貴
■延安整風運動における「階級の敵」と政治秩序 ―― 片岡　涼
■人と蝶とのかかわり
—自然史博物館の検討を中心に— ―― 大岩　楊
■Heritage Commodification in George Town World Heritage Site, Penang, Malaysia ―― Dr Suraiyati Rahman
■THE INDUSTRIAL DEVELOPMENT AND CLIMATE CHANGE OVER A DECADE; DEVELOPING COUNTRY NEPAL ―― Rayamajhi Dipendra

From abroad

■西アジアの文化遺産の重要性
近年のレバノンおよびイラク･クルディスタンでの活動から ―― 西山伸一
■中国留学—北京語言大学での1年間— ―― 横地佑紀

Conference

■モンゴル帝国建設に至るまでのチンギス･ハン(テムジン)
2019年7月8日 大学院国際人間学研究科講演会 ―― 赤坂恒明

News & Record

■第10回「院生の力」研究報告会を開催
■第11回 教員研究会を開催

中部大学大学院国際人間学研究科
Chubu University Graduate School of Global Humanics

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと
身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。

ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート、GLOCAL Vol.15 をお届けいたします。

本研究科は、1991 年に国際関係学部を基礎に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、1998 年に創設された人文学部を基礎とする 2 専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が 2004 年に合流し、名称も「国際人間学研究科」に変更されました。さらに 2008 年には歴史学・地理学専攻が加わり、４専攻体制となって現在に至っています。

グローバル化という言葉が当たり前のように口にされるようになった現在、私たちは社会のどのような領域で仕事をするにしても、国際的な視野をもって自分の果たすべき役割を考えずにはいられません。たとえば、2015 年 9 月の国際連合サミットで採択された SDGs（持続可能な開発目標）は、国家の枠を越えた人類社会共通の目標として広く共有されています。

ただしここで「国際的な視野」というのは、ただ国外に目を向けるということではなく、同時に国内にも目を向けることを意味しています。というのも、これからの時代は以前にも増して色々な国々の人々が日本にやってきて、共に仕事をしたり日常生活を送ったりするようになることが確実だからです。グローバル化というのは、このように日本社会それ自体が国際的な「場」として開かれていく過程なのであり、その意味で自分が暮らす地域への関心はますます重要になるにちがいありません。本研究科はそうした認識に基づいて、グローバルな視点とローカルな視点の両者を軸とする「グローカル」な教育研究を理念として掲げています。

本誌には、多様な専門分野で幅広く活躍する教員の研究報告 3 編と、それぞれのフィールドで着実に研究を進めている院生（卒業生 1 名、外国人留学生 2 名を含む）のレポート 6 編、及び内モンゴル大学特聘研究員による講演会報告が収められています。いずれも短い文章ながら力のこもった内容であり、まさに本研究科が標榜する「グローカル」な視野に基づいた研究の一端をうかがわせるものであると言えるでしょう。

このように教員と院生が同じ誌面で相互の研究内容を共有する機会はきわめて貴重なものであり、研究科としてもますます本誌の充実を図って参りたいと思います。どうぞ今後ともよろしくご指導･ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

2019 年 9 月 3 日

石井　洋二郎（中部大学大学院国際人間学研究科長）

Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　教授

武　藤　彩　加（MUTO Ayaka）

名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻博士課程後期課程修了。博士（文学）。専門分野は現代日本語学（認知意味論）、日本語教育学。最近の科研費では、人間の普遍的な能力のひとつである「味覚」の表現を対象とし、言語間の異同について調査している。またその結果を踏まえ、味を表す表現に現れる生理学的な普遍性（cf. Berlin&Kay 1969）についても検証している。

Forum 日本語のおいしさ表現と共感覚

共感覚的比喩とおいしさ表現：触覚・嗅覚・視覚・聴覚のことばで味を表す

次に挙げる３つの表現にはある共通点がある。それは一体、何であろうか。

（1）やわらかい味　（2）渋い色

（3）黄色い声

これらの表現はすべて、いわゆる文字通りの感覚表現ではなく、ある感覚が別の感覚の形容に使われているという点が共通している。つまり「やわらかい味」「渋い色」「黄色い声」は、それぞれ、もともと触覚を表す「やわらかい」が味（味覚）を、味覚を表す「渋い」が色（視覚）を、そして視覚を表す「黄色い」が声（聴覚）を表しているのである。ちなみに、文字通りに、つまり五感を直接的に表現すると次のような表現になる。

（4）やわらかい感触、渋い味、黄色い色

このように、ある感覚が別の感覚の形容に使われる表現を「共感覚的比喩」表現といい、日本語だけではなく多くの言語にあることが知られている。なお、いわゆる五感（触覚、味覚、嗅覚、視覚、聴覚）の語が味覚を形容する際には、次の４つのパターンがある。

（5）あたたかい味（触覚→味覚）

（6）香ばしい味（嗅覚→味覚）

（7）丸い味（視覚→味覚）

（8）にぎやかな味（聴覚→味覚）

日本語母語話者のおいしさ表現：触覚でおいしさを表す「テクスチャー表現」

以下では、具体的においしさの表現の用例をみていこう。日本語は食感を表す表現（テクスチャー表現）が豊富な言語であるといわれている。次の用例は、あるインターネット上の広告の例である。

（9）柔らかなももの一枚肉を使用し、外はカリカリで香ばしく、中はジューシー。かむと口の中でジュワっと肉汁があふれ、しっかりと味付けしたサクサク衣の食感もくせになる。（日本マクドナルドホールディングス HP、下線は引用者）

こうしたテクスチャー表現に関する研究は、これまで食品科学の分野で多くなされてきた。例えば以下に挙げる早川（2006：43）は、日本語の味のテクスチャー用語リストは 445 語であるとし、これは中国語の約３倍であり、フランス語の 226 語、フィンランド語の 71 語と比べても群を抜いて多いとしている。

厚い	堅い	軟いた	くたっ	ぐにょぐにょ	ゴリッ	ざらつく
固っこい	固い	皮ばった	ロあたりがよい	ぐにょっ	ころころ	さらか
濃っこい	掩状の	キシキシ	ロざわりがよい	クリーミー	ごろごろ	ざらか
固っぽい	かちかち	ギシギシ	ロどけがよい	クリーム状の	ころっ	サンドイッチ状の
濃っぽい	がちがち	ぎっしり	くちゃくちゃ	結晶状の	ごろっ	しけた
軟い	かちんかちん	ぎとぎと	くちゃくちゃ	コキコキ	ころり	しけった
泡状の	かちんこちん	ぎとっ	くちゃっ	こくがある	ごろり	しこしこ
泡の立つ	がっしり	きめ細かい	くちゃっ	固形の	こわい(強い)	しこっ
いがいが	かぢばった	吸湿性がある	くちゃくちゃ	こしがある	ごわごわ	歯ざわりがよい
糸を引く	かみ切れない	硬状の	くちょくちょ	こちこち	ごわっ	歯に残る
薄い	かみごたえがある	吸水性がある	くちょっ	こちっ	こわれやすい	しっかり
うろこ状の	かゆ状の	強靭な	くっつく	こちんこちん	サクサク	しっけた
液状の	かゆかゆ	切れやすい	ぐにゃぐにゃ	ごつごつ	ザクザク	しっとり
液のしたたる	からっ	均一な	ぐにゃぐにゃ	こってり	サクッ	じっとり
薄い	からみつく	くしゃくしゃ	ぐにゃっ	粒状の	ザクッ	じとじと
かくばった	からか	くしゃくしゃ	ぐにゃっ	粒っぽい	裂けやすい	しとっ
かさかさ	カリカリ	くしゃっ	ぐにゃり	粒をふいた	さっくり	じとっ
かさかさ	ガリガリ	くしゃっ	ぐにゃり	細かい	ざっくり	しなしな
かさつく	カリッ	ぐずぐず	ぐにゃぐにゃ	ゴムのような	さらさら	しなっ
かすかす	ガリッ	くずれやすい	ぐにゃぐにゃ	コリコリ	ざらざら	しなびた
かたい	糊状の	くたくた	ぐにゃっ	ゴリゴリ	さらっ	しなやか
硬い	軽い	くだけやすい	ぐにょぐにょ	コリッ	ざらっ	渋い

表１：早川 (2006：43) による日本語のテクスチャー用語（一部）

このように、日本語では多く「触覚」の語でおいしさを表すが、それは、オノマトペ（擬音語・擬態語）が豊富であるという日本語の特性とも関わる（武藤 2016a）。

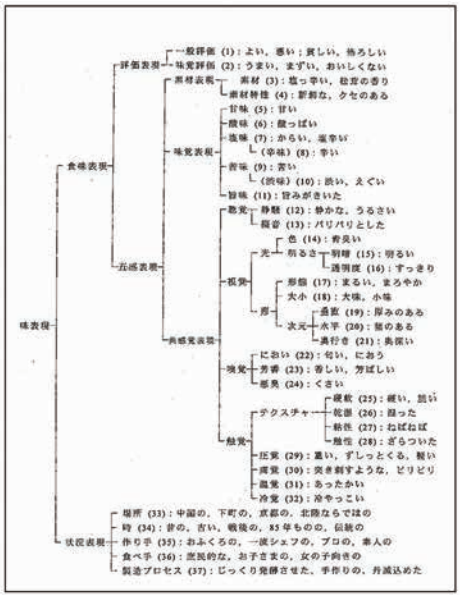


表２：瀬戸 (2003:29) による「味ことば分類表」

英語母語話者のおいしさ表現：sweet と salty

「触覚」の表現で味を表すという日本語の例をみたが、他の言語ではどうか。次に挙げるのは、武藤 (2016b) で示した、英語母語話者を対象とした調査で使用されたおいしさの表現の一覧である。

（1）sweet（甘味･味覚表現、表２参照（以下同））、（2）crunchy（擬音・共感覚表現）、（3）soft（硬軟･共感覚表現）、（4）salty（塩

味·味覚表現)、(5) tasty（旨味·味覚表現)、(6) flavorful（嗅覚・共感覚表現)、(7) fresh（素材特性・素材表現)、(8) delicious（味覚評価・評価表現)、(9) healthy(一般評価・評価表現)、(10) warm（温覚・共感覚表現)

以上のようにこの調査で、英語母語話者はおいしさを表す際に‘sweet’をもっとも多く使用した。‘crunchy’や‘soft’といったテクスチャーの表現がそれに続く。なお、日本語を母語とするわれわれがよく使用するおいしさの表現は、大橋 (2010：43) によると次の 10 表現である。

ジューシー、もちもち、うまみのある、コクがある、もっちり、香ばしい、とろける、焼き立て、サクサク、風味豊かな…

英語の調査結果と日本語とを比較すると、‘crunchy’と「サクサク」(擬音表現)、‘tasty’と「うまみがある」(旨味表現)、‘flavorful’と「香ばしい・風味豊かな」(嗅覚表現）にはともに同種のおいしさを表しそうだ。他に、‘soft’と「モチモチ」(硬軟表現)、‘warm’と「焼き立て」(製造プロセス）等にもともにあたたかさといった共通項が感じられ、関連性が感じられる。つまり日英語とも、甘味や旨みといった味そのもの（味覚）以外にも、歯ごたえ・柔らかさ・弾力性、あたたかさ（触覚）や、におい（嗅覚）といった様々な要素を「おいしい」と感じている可能性がある。

英語のまずさ表現：salty が表す意味

一方、まずさを表す表現については、次のような表現が使用された。

(1) dry（辛味·味覚表現)、(2) bland（硬軟・共感覚表現)、(3) sour（酸味・味覚表現)、(4) bitter（苦味・味覚表現)、(5) salty（塩味·味覚表現)、(6) hard（硬軟·共感覚表現)、(7) oily（素材特性·素材表現)、(8) gross（一般評価・評価表現)、(9) tough（一般評価·評価表現)、(10) old（時·状況表現)

日本語で「塩辛い」がおいしさを表しにくいのに対し、英語では salty がおいしさにもまずさにも使用されているという点が注目される。他に、dry（辛味）や hard·tough（硬さ)、sour（酸味）や bitter（苦味）もまずさを表す際に多く使用されるようである。それでは、次の日本語の辛味、塩辛さ、固さ、酸味、苦味を表す表現はどうだろうか。

辛い、激辛、ピリ辛、塩辛い、しょっぱい、うす塩、ソルティ、固い、酸っぱい、サワー、苦い、ビター、噛みごたえのある、歯ごたえのある、ガリガリ、ゴツゴツ…

これらの表現は、やはり日本語においてもまずさを表すことが多いのだろうか。さらに調査を続ける。

韓国語母語話者のおいしさ表現：固さと柔らかさ

さて、韓国語は、日本語以上に、オノマトペ（擬音語・擬態語）が豊富な言語であるといわれているが、日本語と同様、おいしさを表す際にテクスチャー表現が使用されるのだろうか。この点について調査を行った結果、韓国語においては表 2 のうち、「共感覚表現」が多く使用されるという結果を得た（武藤 2015)。中でも、「硬軟」の表現でおいしさを表す例がもっとも多く、使用回数の上位 1 位 2 位とも「やわらかさ」を表すテクスチャー表現であった。その一方で、3 位から 10 位の間には固さや歯ごたえを表す表現が続いたことから、韓国語では固さとやわらかさ、両方でおいしさを表す可能性がある。なお、日本語の硬軟の表現とは瀬戸 (2003：52) によると次のようなものである。

堅い、柔らかい、ふにゃふにゃの、ふんわりとした、噛みごたえのある、さくさくとした、ホロホロと、シャキッとした、ザックリ…

ここには食品に対するマイナス評価のものも含まれるが、日本語の硬さ・柔らかさの表現もやはり多種多様である。

生理学的普遍と認知の多様性：ヒトとしての共通性と文化により生じる差異

日本語の、特に食に関するオノマトペの豊富さには、味や食感に関する関心の高さがうかがえる。引き続き調査研究を重ねる必要はあるが、日本語は世界で最も味の表現が発達している言語のひとつであるという可能性もある。これまで、アジアの言語（中国語、タイ語、韓国語)、そして非アジアの言語（英語、スウェーデン語）およびトルコ語を対象に、味の表現の使用実態に関する調査を実施してきたが（武藤 2017、2018ab、2019)、引き続き、検証を続ける。

以上でみた味に関する語彙体系の発達は、味覚という、私たち人間が共通に持つ普遍的な能力を土台としながらも、言語ごとに認知の多様性が生じることを示唆している。つまり、語彙によって符号化されている意味は、その社会・文化環境に適した情報処理を促す結果として生じている。

【謝辞】：この研究は JSPS 科研費 JP16K02636 の助成を受けたものです。
基盤 C：「味覚語彙における普遍性と相対性に関する研究」、(研究代表者：武藤彩加)

引用文献

(1) 大橋正房他編著 (2010)『おいしい感覚と言葉 食感の世代』, 株式会社 B/M/FT 出版部 .
(2) 瀬戸賢一 (2003)『ことばは味を超える　美味しい表現の探求』, 海鳴社.
(3) 早川文代 (2006)「テクスチャー（食感）を表す多彩な日本語」,『豆類時報』52, 日本豆類基金協会, 42-46.
(4) 武藤彩加 (2015)『日本語の共感覚的比喩』, ひつじ書房 .
(5) 武藤彩加 (2016a)「日本語におけるテクスチャーを表すオノマトペースウェーデン語と英語, および韓国語と比較して－」, *Journal CAJLE Vol.17*, Canadian Association for Japanese Language Education, 64-86.
(6) 武藤彩加 (2016b)「英語母語話者によるおいしさの表現－日本語との比較を通して」,『広島国際研究』22, 広島市立大学国際学部, 105-115.
(7) 武藤彩加 (2017)「味を表す表現における動機づけに関する一考察－生理的動機づけ, 認知的動機づけ, および環境的動機づけ」,『日本認知言語学会論文集』18, 日本認知言語学会, 452-458.
(8) 武藤彩加 (2018a) 味を表す場面における「事態把握」に関する一考察—複数の言語との比較から,『比較文化研究』5, 久留米大学 比較文化研究所, 20-38.
(9) 武藤彩加 (2018b)「タイ語母語話者による「味を表す表現」, *CAJLE2018 Proceedings*, Canadian Association for Japanese Language Education, 181-190.
(10) 武藤彩加 (2019)「味を表す表現の使用に関する一考察－対象言語学的観点から－」,『国際学部叢書』9, 広島市立大学国際学部, 79-96.
(11) Berlin, Brent; Kay, Paul (1969) *Basic Color Terms : Their Universality and Evolution*, University of California Press.

Profile
国際人間学研究科　歴史学・地理学専攻　准教授
佐々井　真　知（SASAI Machi）

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻博士後期課程修了。博士（人文科学）。専門分野は中世イングランドの都市社会史。14･15世紀のロンドンに関心があり、とくに商工業者の生活について、同職ギルドの役割や人と人とのつながりに注目して論じてきた。現在は「外国人」というテーマからロンドンを考えることを試みている。

Forum

「外国人」から考える15世紀のロンドン

イギリスと「外国人」

現代のヨーロッパは、移民の受け入れや定着をめぐる課題に直面している。イギリスも例外ではなく、EU からの離脱を求める声の背景に移民問題があったことは記憶に新しい。しかし、海外からの移住者は、近現代になって初めてイギリスに登場したのでは決してない。前近代にも、島国イギリスに多くの「外国人」が渡り、中には定住する人びともいた。

これまでの研究では、そのような「外国人」については、16 世紀以降にヨーロッパ大陸からイギリスに亡命したプロテスタント難民が注目されてきた。彼らが持ち込んだ新技術と、それによるイギリスの社会・経済の変化が論じられてきたのである。大きな影響をもたらした彼らプロテスタント難民が、イギリスへの初期の移民と位置づけられることが多いように思われる。

しかしながら、15 世紀以前のイギリス（イングランド）にも「外国人」は流入しており、一時的に滞在する商人だけでなく、現代の移民のようにイングランドの地に定着した人びとがいたことも確かである。彼らは当時のイングランド社会とどのような関係を結んでいたのだろうか。受け入れ側であるイングランドの人びとは、彼らをどのように捉え、彼らとどのように付き合っていたのだろうか。現代と同じく大都市であり、多くの人が行き交っていた 15 世紀のロンドンについて見ていきたい。

15 世紀ロンドンと「外国人」

では、15 世紀のロンドンではどのような「外国人」が見られたのだろうか。当時のロンドンでは、人口 50,000 人のうち約 6% が「外国人」だったとされている。出身地は、ドイツ・フランドル地方、イタリア諸都市、スコットランド、アイルランド、フランスなど多様である。居住する「外国人」の中心は、家族単位で生産活動を行う手工業者とされる。

ここで、「外国人」ということばについて説明しておきたい。史料上では、英語の場合 foreigns（foreigners）、strangers、aliens と記されたり、出身地別に French、Venetian などと記されたりする人びとがいるが、誰が「外国人」とされるかは状況によって異なる。たとえば、「外国人」に対する課税では、ある年の課税では課税の対象とされたハンザ商人が、別の年の課税では対象外となる例がある。また、foreigns や strangers ということばは、「外国人」だけでなく、イングランド内の当該都市以外の地域から来た人びとも指す場合がある。したがって、史料ごとにどのような人びとが「外国人」とされていたのかを検討していく必要がある。本稿では、イングランドの領域外から来た人びとについて述べられていると判断しうる史料を用いて、彼らを「外国人」と呼ぶこととする。

14・15 世紀のロンドン史研究では、これまでも「外国人」が注目されてきた。スラップの研究により人数・出身地・居住地などの概要が示され、その後ボルトンにより「外国人」に課された特別税の税額査定リスト（1483 ～ 1484 年）が刊行された。スラップの後の研究では、王権や市当局の態度の分析から「外国人」とロンドンの関係が友好的なものだったのか、敵対するものだったのかという点が論じられてきた。近年では、「外国人」のコミュニティの存在や「外国人」のアイデンティティも関心を集めている。さらに、2012 年～ 2015 年に行われた「外国人」データベース作成プロジェクトにより完成したデータベース England's Immigrants 1330-1550 の公開により、イングランドの「外国人」研究は進展しつつある。

一方で、概要についてはより高い精度で明らかにされつつあるものの、市当局、各種団体、個人などの「外国人」への対応については研究の余地がある。この点がさらに明らかにされ、論じられることにより、「外国人」が少なからず存在した中世ロンドンの新たな都市社会像の提示が可能になるのではないか。

金細工師ギルドと「外国人」

本稿では、ロンドンの金細工師ギルドを取り上げ、金細工師ギルドと「外国人」の関係を考えたい。金細工師は、金銀を用いて食器類や装飾品を製作する人びとである。比較的裕福な人びとが多く、15 世紀ではロンドン市長や市参事会員の経験者もいる。本稿で注目したいのは、「外国人」金細工師が多数い

た点である。たとえば、先行研究によれば、1477 年から 1478 年の史料には 179 名の金細工師が確認され、うち 41 名が「外国人」とのことである。とくに多いのは、史料上で Dutch、Doche、Teutonic と記される、ドイツ・フランドル地方の出身者である。

中世後期の金細工師ギルドに関する史料としては、規約集と議事録及び会計簿が現存している。規約集は 1478 年にまとめられたもので、レッダウェイとウォーカーの著書の巻末に収録されている。議事録・会計簿は 1334 年以降のものが現存しており、1334 年から 1446 年についてはジェファソンによって刊行されている。本稿では規約集を用いて、金細工師ギルドの「外国人」への対応を考えたい。

規約集には 94 の規約が収録されており、このうち 7 規約が「外国人」に関係するものである。この規約集に収録されている規約すべてが 1478 年の時点で有効だったのかなど、規約集の利用については検討が必要であるが、本稿では、それぞれの規約が制定された年代にどのような対応がとられていたかという視点で読んでいく。収録された規約のほか、1434 年に制定され、議事録に収録された “Ordinance of Dutchmen” と題される規約も参照する。

これらの規約を見ると、まず、「ロンドンの金細工師」として活動する「外国人」金細工師がいたことが明らかになる。そのような、独立して、つまり親方として活動する「外国人」金細工師がいた一方で、イングランド人あるいは「外国人」の金細工師に雇用されている「外国人」金細工師もいた。1271 年、1394 年の規約で「外国人」金細工師の雇用には監事の許可が必要であるとされている。1394 年の規約はまた、親方が「外国人」の登録料を支払うことを定めてもいる。さらに、「外国人」金細工師が増加したとされる 15 世紀には、1434 年、1448 年に「外国人」の活動禁止、「外国人」との取引禁止が定められている。しかしながら、1434 年には議事録に氏名が記されれば「外国人」も活動が可能であるとされ、また 1448 年には親方が自分の家で働かせるなら雇用してもよいとされている。「外国人」金細工師を一律に排除しようとしているのではないことが読み取れる。

また、1469 年には、「外国人」への対応がロンドンへの居住期間によって区別されている。ロンドンに 5 年以上居住している「外国人」は、これまで通り仕事場での活動が可能とされる。居住期間が 5 年未満の場合は、1 年以内に 20 シリングを監事に納入することとされた。20 シリングというのは、金細工師ギルドの徒弟の登録料と同額である。さらに、この規約がその半分を割いているのは、今後イングランドにやってくる金細工師についての取り決めである。それによると、5 年間は親方の下で職人として働くこと、親方はその「外国人」を監事に提示すること、5 年後に独立して仕事場や店での活動を希望する場合は監事の面前で能力と技術を証明し、さらに 2 年間の善き行いが証明されるべきこととされている。合計 7 年間、親方などのもとでの活動が求められているが、これは金細工師ギルドの徒弟に求められる訓練期間と同じである。金細工師ギルドは「外国人」に対して、ギルドの管理下で十分な技術力を身につけることを求めたと考えられる。

このように、金細工師ギルドは「外国人」を一括して排除する姿勢はとらず、どのように管理するかを重視していた。また、「外国人」に対して、居住期間を考慮するなど個々の状況に対応していたともいえる。この背景にあるのは、品質の低下への危惧だろう。10 代から徒弟として訓練された金細工師と異なり、イングランド外からやってくる「外国人」はその技術力が不明である。彼らについて、改めてロンドンの金細工師の下で訓練することで、独立しての活動が認められるだけの技術力を身につけることを促したのではないか。

しかし、さまざまな規約を制定してまで「外国人」を排除せずに管理下に置こうとしたのはなぜか、という疑問は残る。その理由がいわゆる労働者不足の解消なのか、流入を止めることのできない「外国人」への苦肉の策なのか、あるいは別の背景があったのかについては、今後の検討が必要である。

おわりに

金細工師ギルドの規約から明らかになるのは、滞在歴も能力も活動状況も様々な、多様な「外国人」の存在である。これは、課税記録では明らかにならない一面である。概要をつかむことが重要である一方で、本稿で検討したような事例を積み重ねることも、都市社会と「外国人」との関係を考える上で不可欠である。また、金細工師ギルドの例は、「外国人」との共存を模索した、あるいは模索せざるを得なかった例の一つとして、注目されるべきだろう。加えて、16 世紀以降のプロテスタント難民の流入以前から、ロンドンの商工業社会は「外国人」の影響を受けていたことも指摘できる。

今後は、このような対応をとった金細工師ギルドの状況の調査、議事録を利用しての規約の運用の調査、ほかの同職ギルドの状況との比較に加え、王権や都市当局の「外国人」対応との関連性の検討が必要になるだろう。課題が多くあるテーマだが、それだけ「外国人」という切り口から都市社会を考えることの可能性もあるといえるのではないか。

引用文献

パニコス・パナイー著、浜井祐三子・溝上宏美訳『近現代イギリス移民の歴史　寛容と排除に揺れた 200 年の歩み』（人文書院、2016 年）

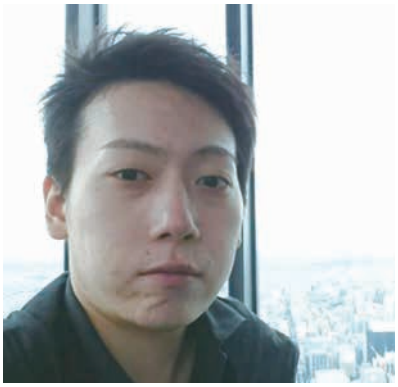
Bolton, J. L., ed., *The Alien Communities of London in the Fifteenth Century: The Subsidy Rolls of 1440 and 1483-4* (Stamford, 1998)

Jefferson, Lisa, ed., *Wardens' Accounts and Court Minute Books of the Goldsmiths' Mistery of London 1334-1446* (Woodbridge, 2003)

Reddaway, T. F. and Lorna E. M. Walker, *The Early History of the Goldsmiths' Company 1327-1509* (London, 1975)

Thrupp, Sylvia L., "Aliens in and around London in the Fifteenth Century", in *Studies in London History Presented to Philip Edmund Jones*, ed. by A. E. J. Hollaender and William Kellaway (London, 1969), pp. 251-272

England's Immigrants 1330-1550: Resident Aliens in the Late Middle Ages https://www.englandsimmigrants.com/（最終閲覧日：2019 年 7 月 22 日）



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 1 年

梶 原 大 貴 (KAJIWARA Daiki)

1996年生まれ。2019年4月、本研究科に入学。専門は近現代日本文学。主に日影丈吉、色川武大、笙野頼子などの自己語りと幻想が結びついた作家に注目をしている。

Notes

日影丈吉『泥汽車』を読む

日影丈吉について

本名は片岡十一。明治 41 年（1908）に東京市深川区に生まれる。昭和 24 年（1949）に『かむなぎうた』で雑誌『宝石』よりデビュー。主要作品に『吉備津の釜』（1959）、『応家の人々』（1961）、『泥汽車』（1989）など。現実と非現実の境界が曖昧になるような、幻想的な作品を描く作家として一定の評価を得ている。

『泥汽車』

『泥汽車』は日影丈吉の少年時代の体験をもとに書かれた作品であるが具体的な場所や、年代はぼかされている。主人公の少年は身近で行われる自然破壊を見つめながら、超自然的存在（モノノケ）との関りを経て、だんだんと忙しくなりつつある日々のふとした間隙に自然とは、世界とは何かを理解する手掛りを発見する。

この作品の研究で問題にしたこととして解釈をめぐる二つの立場がある。一つは自然と文明の二項対立を作品に当てはめて、破壊されていく自然を少年期の終わりに重ねて語る物語とする解釈。（奥野健男、堀切直人）「そしてもうこの時代から無神経な自然、いや由緒ある景観の破壊が恐るべき無神経さで行われてきたのかと思うと慄然とする」（1）

二つ目は少年の「私」が自然による神秘的な体験を通して自然、世界の本質を「ただ変わること」だと規定する所から「閉じられた世界からの脱出譚」（2）とする解釈。（横山茂雄）

これらの解釈にはそれぞれ批判すべきポイントが一つずつ存在する。まず、少年は本当に自然破壊に憤りを覚えていたのかという問題。横山は奥野の解釈に対して自然の破壊に焦点を当てて『泥汽車』を要約するのは危険だと述べた。この指摘は正しいと思われる。なぜなら、作品内で暗示される関東大震災以後と以前で主人公の行動、価値観は大きく変化するため、自然と文明の対立構造は、物語後半では機能することが難しくなるからだ。少年は、世界をただ変化することのみが存在するのだというふうに規定する。

次に（横山の論考に対して）話の後半部だけに焦点を当てて解釈するのは不十分ではないかという問題。横山の論考では物語の多くを占める少年とモノノケとの交流や自然破壊の描写を無意味なもの、危険ものとしてほとんど論考において触れておらず、したがってそれは一面的な見方と言わざるをえない。

もう一つ問題にするべき点として、作品の前半部分における超自然的存在（モノノケ）が「母」を象徴しているという点について述べたい。『泥汽車』においてモノノケはほとんど女性として描かれ、母性を想起させるような特徴を持っている。「それは死人のような白い着物を着て、髪を長く垂らした女で（中略）女はすっぺりした、やさしい顔をしていて（中略）きらびやかな衣装を着た、ふくよかな女になった。」これは、他の日影作品にも共通する要素の一つであり、紙村徹「日影丈吉の描いた台湾の『闇の奥』―日影丈吉はいかにして異郷台湾と出会ったのか」でも怪異として登場してくる女性は「母性的」であると指摘されている。

以上の点を考慮しながら、震災後の少年の自然に対する中立的な態度、変化を受け入れる態度、“母”を象徴する“モノノケ”との決別を統合して、私は『泥汽車』を少年の成長と郊外の都市の開発を象徴的に重ねた物語であるとした。

おわりに

これからの研究として日影作品の「幻想」の 成り立ちに焦点を当てて、例えば朧化、回想、超自然的存在などの要素がどのように互いに影響を及ぼしながら結びつき、「幻想」を成り立たせているのか。また卒論ではほとんど取り上げなかった語り手の機能などをたよりに、物語の内容について、また幻想の意味について分析し、日影丈吉の幻想作品の特色について明らかにしたい。

注

(1) 奥野健男「解説」『鳩』早川書房 1992 年
(2) 横山茂雄「解説」『日影丈吉全集』第七巻 国書刊行会 2004 年

Profile

国際人間学研究科　歴史学・地理学専攻　博士前期課程１年

片　岡　　涼（KATAOKA　Ryo）

1997年岐阜県生まれ。中部大学人文学部歴史地理学科卒業。現在、中部大学大学院国際人間学研究科（歴史学・地理学専攻）博士前期課程1年。専攻は中国共産党史。修士研究では、日中戦争期の中国共産党を対象に、歴史学と政治学の両分野からのアプローチを試みている。

Notes

延安整風運動における「階級の敵」と政治秩序

現代中国政治体制の強靭性

現代中国政治研究の重要な問題のひとつは、中国共産党が今も国家の支配を維持し続けている要因の解明である。このような中国政治体制の強靭性をめぐる議論は、政治学ではより最近の「現代中国」を対象とし、歴史学においては建国以前の「近代中国」を対象としてきた。

本研究は建国以前の「近代中国」を対象として中国政治体制の持続力の源を探究するものである。この時期を対象とする理由には、毛沢東時代の政治体制が戦時下の延安で形成された指導体制を継承していたからである。また毛沢東時代以後の政治体制も、国内外の情勢により性格上の違いはあるものの、「すべては共産党の指導のもと」という原則の姿勢は維持されている。（毛里和子、2004年）。

筆者の関心は、建国以前の「近代中国」のなかでも、抗日戦争期に中国共産党が発動した延安整風運動にある。なぜなら、延安整風運動こそ抗日戦争期における中国共産党の指導体制が形成される時局だったからである。従来考えられていた延安整風運動の性格は、毛沢東ひとりの存在の突出がみられるために、毛の権威の確立を促したものとされる（丸田孝志、1993年）。しかしながら、この時期の党は国家再建を想定した党の建設を政策の中心としている。そのため、延安整風運動において中国共産党の指導体制が形成されたと言え、建国以後も連続する政治体制の原動力を明らかにする鍵もそこにあるといえよう。

指導的機能の変革

抗日戦争期における中国共産党は、日本軍と相対するなかでも、その基本的方針は党の建設であった。1942年２月にはじまる延安整風運動では、党の建設を円滑に推進するための指導的機能の変革がなされた。S・R・シュラム（1989年）は、延安で導入された基軸となる概念が、党による統一と指導の役割の核心を示す意味をもつ「一元化」にあると論じる。これは1943年３月20日の中央政治局決定と同年６月の毛沢東「中共中央の指導方法の決定」において確認できる。すなわち、延安整風運動の過程で指導体制は「一元化指導」として確立されたのである。こうした指導体制は、中央総学習委員会と中央社会部の両機関を主体として実現に向かった。

反スパイ闘争の経験

「一元化指導」の実現は反スパイ闘争の経過から観察することができる。1943年４月３日の「引き続き整風運動を展開することに関する決定」において、「幹部の中の非プロレタリア階級思想を正すこと」、「党内に潜伏している反革命分子を一掃すること」と記されることから、整風運動は党の特務政策と連結して行われたことがわかる。また党中央が秘密裏に発した「防奸経験介紹」によると、1943年７月９日～８月15日における搶救運動は、大衆的な反スパイ闘争路線を築いたとされる。これらのことから「一元化指導」の実現には、「大衆との結合」が重要な課題であった。

「階級の敵」

反スパイ闘争が本格化する以前、毛沢東は「文芸講話」（1942年５月）のなかで、現在の思想闘争は、「プロレタリアートの指導する革命的な新民主主義社会を建設するには、新しい大衆と結合しなければならない」ものであるといった。毛のいう「大衆との結合」は1943年４月３日の党中央の決定で具体化されたと言え、それが反スパイ闘争として実践された。共産主義社会における社会階級に対する闘争形態では、「階級の敵」と称する指標がたてられる。そのようなわけで、延安整風運動では「階級の敵」を基軸とする指導体制の変革が行われ、それを下に政治秩序が形成されると想定できるのである。

引用文献

「中共中央関於継続展開整風運動的決定」（1943年4月3日）中央檔案館『中共中央文件選集』第14冊、1991年。

郭華倫著、矢島鈞次監訳『中国共産党史論』第4巻、春秋社、1991年。

毛沢東「在延安文芸座談会上的講話」（1942年5月3日、23日）毛沢東文献資料研究会編『毛沢東集』第8巻、蒼蒼社、1989年。

Profile

国際人間学研究科　国際関係学専攻　博士前期課程 1 年

大 岩　　楊 (OIWA YANAGI)

1996年愛知県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科国際関係学専攻博士前期課程在学中。専門は博物館学。現在、蝶に着目し、自然史博物館を中心に研究している。

左の写真はスミソニアン協会アーカイブスにて撮影

Notes

人と蝶とのかかわり
―自然史博物館の検討を中心に―

はじめに

本研究は、自然史博物館に展示された蝶の研究を通し､自然界と人との関わりを探求する。

研究方法

自然史や、蝶に関する先行研究のレビューを行うほか、博物館では展示方法など、どのような取り組みを行っているのかフィールドワークを行う。

研究経過：フィールドワークを中心に

蝶に関連する資料を研究する一方、フィールドワークも行った。

①科学史学会（2019/5/25）

溝口元氏による「日本の蝶研究史における図譜と新種記載」や名和昆虫博物館館長、名和哲夫氏の「名和昆虫博物館 100 年史」記念講演を聞いた。講演が始まる前、名和哲夫氏にお話を伺うことができた。

1. 名和昆虫博物館は公的な博物館とは違う。
2. 同館では大人や虫が嫌いな人でも来たくなる場所を目指している。
3. そのために、どうやったら興味を持つか、どのような展示をすればよいのか日々研究している。

現地を訪れてみると 2 階にはクイズコーナーもあり、楽しみながら学べる工夫がされていた。昆虫が嫌いな人でも、笑顔になるような展示がいくつもされていた。科学史学会の会場では名和昆虫博物館から特別に標本をいくつかもってきており、特設コーナーが出来ていた。

②中部大学蝶類研究資料館

（2019/7/26 視察）

日本有数の蝶の研究家・コレクターとして著名な藤岡知夫氏が半生をかけて収集した日本産蝶類の生物相を示す標本を収蔵する資料館である。7 月 28 日にサイエンスカフェを開催。8 月 24 日には昆虫 DNA 研究会公開シンポジウムも開催された。

③名古屋市科学館　特別展「絶滅動物研究所」

（2019/8/10、9/15 視察）

名古屋市科学館による夏季限定の特別展である。人間によって絶滅した動物について知ることができ、絶滅の危機に瀕している動物をどのように保護しているのかについても動物園の活動を例に解説している。地域と絶滅というブースにはギフチョウが展示されていた。

④スミソニアン協会での調査

（2019/8/25-29）

8 月 24 日から 29 日の 5 日間アメリカのスミソニアン協会にて調査を行った。ナチュラルヒストリーの展示責任者と意見交換を行い、展示を決めていく上で何が重要なのかなど、様々な話を伺った。27 日には国立自然史博物館（NMNH）を視察し、同館内のバタフライ・パビリオンを訪れた。バタフライ・パビリオンの使命は、好奇心を刺激し自然界について発見することにより、博物館の使命を実現することである。また、設立の理由として、生物多様性と進化的および生態学的プロセスを理解し、存在する生命を十分に評価し、保護することである。28 日には国立植物園を訪れ、温室や併設するバタフライガーデンにて視察を行った。最終日にアーカイブスにて Dr. Pamela Henson にお会いする機会を得た。彼女は博士論文 Evolution and taxonomy で、J.H.Comstock の昆虫学を探求した人である。その時に、Comstock や妻 Anna Comstock について話してくれた。Anna Comstock という人物は､芸術家､教育者､自然保護主義者､自然学習運動のリーダーであり、植物学と昆虫学に関する多くの記事を執筆した。意見交換のあと、関連資料の調査を行った。

おわりに

NMNH が掲げる使命にある通り、博物館は、自然界と私たち人間の地位を理解し、促進する場所である｡また､博物館のコレクションは地球の歴史を伝え、環境と人間の相互作用の記録である。持続可能な世界を作っていくうえで、コレクションが出発点となり、未来をどのように作っていくことができるかについての教科書なのである。

現在まで蝶について研究してきたが、明確な方向性が見えてこなかった。しかし、今回 4 つのフィールドワークを終えて、少しずつだが形になってきていると感じる。特に、スミソニアンのアーカイブス調査にて興味深い資料が多く見つかりうれしい限りである。今後も , フィールドワークや文献調査を通して、自然界と人との関わりを明らかにしていきたい。

Profile

Dr Suraiyati Rahman

BSc and MSc in Urban and Regional Planning (USM), Ph.D in Tourism Planning (University of Birmingham, UK)
School of Housing, Building and Planning, Universiti Sains Malaysia (suraiyati@usm.my)
Area of Expertise: Tourism Planning, Heritage Tourism, Urban Planning and Impact Assessment.

Notes

Heritage Commodification in George Town World Heritage Site, Penang, Malaysia

Introduction

Heritage buildings, monuments and cultures are heritage resources that remind us of history a contribute to sense of place (Suraiyati, 2013). Recently, historical resources have been used widely to shape the socio-cultural identity of places. Experiencing heritage has become one of several priorities in the cultural motivation to travel, resulting in a commodification of the past (Waitt, 2000). According to Ashworth (2012), the built environment resulted from human needs, and this can be seen in the physical morphologies and usage of the physical environment

Heritage Commodification Concept

Heritage commodification is the process of transforming historic resources into a contemporary commodity to satisfy a current consumption need. Wight (1994) claimed that a destination with maximum business goals of tourism development but few strategies for cultural heritage conservation might lead to the loss of its culture and tradition. Similarly, Li (2003) stated that intensified efforts to conserve a cultural heritage rather than to develop it for tourism may lead to the failure of businesses in a destination. George Town possesses a distinctive character as a heritage city and was nominated as a World Heritage Site by UNESCO in 2008 under category II, III and IV, according to the Outstanding Universal Value (OUV). The world' s recognition of the branding image of a heritage site has made it a popular destination for international and local tourists. Consequently, the demands of heterogenous users have transformed the preservation of the built heritage. However, it cannot be denied that the changing nature of the residents, who are not keen to reside in the inner city of George Town compared to a few decades ago. This has led to a re-adaptive use of the colonial premises in the inner city of George Town. Although the original functions of the premises might not be doable for the present day, but the attempt to conserve the pre-war premises might revitalise the heritage city and generate the economy.

Conclusion

Lesson learnt from a few examples of World Heritage Site in Asean countries has shown dramatic changes of social structure and impact to local business sustainability. Scope of heritage is facing dilemma due to importance of national identity; hence national tourism policy direction has emphasis on safeguarding and ensuring the equity of heritage resources for future generation. Understanding the market demand at this era is essential as they play an important role in purchasing, experiencing and learning on heritage products.

References

Ashworth, G.(2012) Preservation, Conservation and Heritage: Approaches to the Past in the Present through the Built Environment, *Journal Asian Anthropology*, 10(1),1-18.

Li,Y.(2003) Heritage Tourism:The contradictions between conservation and change, *Tourism and Hospitality Research*, 4(3), 247-261.

Suraiyati,R.(2013) Heritage Management Challenges in Historic Town of Ludlow, England, *World Applied Sciences Journal* 24 (12): 1589-1596.

Waitt, G.(2000). Consuming heritage. *Annals of Tourism Research*, 27(4), 835-862.

Wight P.(1994) Environmentally responsible marketing of tourism. In *Ecotourism: A Sustainable Option?* (E. Cater and G. Lowman, eds). London: Wiley.

Profile

KN 17005

Rayamajhi Dipendra

Master of International Human Studies
Department of International Relations
Born and did secondary education from Arghakhanchi, Nepal. Graduated in English Education from Tribhuvan University in Kathmandu

Notes

THE INDUSTRIAL DEVELOPMENT AND CLIMATE CHANGE OVER A DECADE; DEVELOPING COUNTRY NEPAL

Introduction

Industrial Development

In a way Nepalese industrial sector has been developed in comparison to former technology and condition. But the steps to make Nepalese industrial sector more advanced and better are the concerned areas. Climate change and affected areas, organizations and people related to this field are interviewed so that the actual condition of Nepal by climate change could be resembled. Pollution by the development of industrial sector and remedial ways are elaborated.

Industrial development plays vital role for any nation to uplift in economic sector. Nepalese industry from the starting of the ancient period, manufactured many kinds of metallic and wooden as well as cotton and woolen goods. And the same tradition was followed in the modern period as well. Talking about modern industries in Nepal, were came in to existence lately. Rana rulers from initial phase did not pay attention to establish modern industries. Rana rulers focused on political, social and economic power in their hands. Their negligence was not only to establish new industries but also to maintaining the old cottage industries.

According to the Nepal`s leading English daily newspaper Republica, Nepal`s exports grew by 13 percentages in first half of fiscal year 2017/18. Nepal`s top exports are hand knotted carpet especially which have high demand in Europe,GDP is heavily dependent on remittances. Nepal`s economic development in social services and infrastructure has no dramatic progress.

Climate Change

The term global warming is rise in the average temperature of the Earth. Human being have caused huge amount of warming comparing to past centuries. Melting glaciers, rise of sea level, struggle of wildlife to survive are some of the results of global warming. Greenhouse gases and their levels are higher now than last 650,000 years. Global warming is causing a set of changes to the Earth`s climate, or long- weather patterns, that varies from place to place.

Conclusion

Industries in Nepal are still not developed in terms of technology and production. But pollution from the industrial sector has affected the climate in large volume.. Mountainous nation Nepal is also damaged by climate change.

References

National Aeronautics and Space Administration(NASA)climatenasa.gov/evidence Accessed: August 25, 2019

International Centre for Integrated Mountain Development (ICIMOD) icimod.org Accessed: August 25, 2019

National Geographic Channel, Climate Change Stories https://www.nationalgeographic.com/environment/ Accessed: August 26,2019

Republica,February 3, 2018(Nepalese English Daily Newspaper) Available from: https://myrepublica.nagariknetwork.com

Sharma,Kandel Devi Prasad, (2009), *Trade and Industry of Nepal during the Rana Period*, Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu

Profile

国際人間学研究科　歴史学・地理学専攻　准教授

西　山　伸　一 (NISHIYAMA Shin'ichi)

早稲田大学大学院文学研究科（博士後期課程）中退。ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン考古学研究所留学。修士（考古学）。専門分野は、西アジア文明史、考古学、文化遺産学。主に西アジア、中央アジアの遺跡調査、文化遺産保護事業などに参画してきた。現在はレバノンとイラク・クルディスタンで考古学プロジェクトを展開。

From abroad

西アジアの文化遺産の重要性

近年のレバノンおよびイラク・クルディスタンでの活動から

はじめに

日本の国際貢献はつとに知られているが、文化面での国際貢献はそれほど世間に知られているとはいいがたい。しかし、実際には多くの日本調査団が、海外の世界遺産を含む文化遺産を保護するために日夜さまざまな努力を行っているのである。ここでは、西アジアにおける文化遺産の重要性について述べるとともに、昨年度本学で開催された「西アジア考古学・文化遺産セミナー」について紹介したい。さらに、現在私が中心となっているレバノン共和国とイラク共和国クルディスタン自治区の考古学調査についても言及する。

西アジアの文化遺産の重要性

まず、西アジアという地域について言及しておきたい。西アジア、あるいは「中東」（元来はイギリス・フランスから見て中程度の距離にある東方地域のこと）と呼称される地域（一般に東はアフガニスタンから西はトルコまで）は、日本人にはおそらくもっともなじみの薄いアジアではないだろうか。日本で流れる多くのニュースが中東を「危険」「テロ」「戦争」などのイメージで覆いつくしている。「イスラーム」という日本人にはなじみの薄い宗教も西アジアを「異国の地」として位置付けるのに十分な役割を果たしている。

しかし、実際の西アジアは、私たちの生活に多大な貢献をしてきた地域なのである。人間が初めて農耕（土地を耕し作物を作ること）や牧畜（家畜を飼い、ミルク、肉、皮などを利用する）を行ったのが西アジアであり、この「新石器革命（食料生産革命）」を経て、現代の文明社会が作られているのである。いまや当たり前になっている国家やそれに付随する軍隊、官僚組織、また商人集団などもこの地で最初に誕生した。もっと身近なところで例を挙げるとパン、チーズ、ヨーグルト、ワイン、ビールなどもすべて西アジアで最初に生み出されている。つまり古代西アジアの人々がいなければ私たちの暮らしはまったく別物になっていたかもしれないのである。

古代ギリシア語で「メソポタミア」と呼ばれる現在のイラクを中心とする地域は、文明社会が世界で最初に発生した場所である。やがて近隣のエジプトや中国、南アジア（インダス河流域）などでも文明社会が成立していった。現在の考古学的知見では、日本で知られている「四大文明」よりもずっと多くの文明社会が世界各地で成立したことが知られている。しかし、今ところ最古の文明社会は、前４千年紀後半に西アジアで誕生したと考えられている。西アジアは、それ以降、人間社会の最先端を走ってきたのである。西アジアというと戦争・紛争、テロのイメージを持つ人は多いが、近現代史を振り返れば、それはここ 100 年ほどの出来事で、欧米諸国の介入がその大きな要因であることが理解できるだろう。つまり、西アジアに残されている文化遺産は、私たち人間の歩みを教えてくれるものなのである。ここに西アジアの文化遺産の重要性がある。

現代の西アジアは、報道でたびたび取り上げられるように、動乱の歴史を歩んでいる。シリアは内戦状態にあり、イランとアメリカの対立、サウジアラビアとイランの対立、パレスチナ・イスラエル問題など国際政治をゆるがす課題が目白押しである。しかし、これも歴史的な長期スパンでみると西アジアには、世界の注目をあつめる要因があり、そのため世界を巻き込んだ争いが展開されているということがわかるだろう。

私たちは情報過多の時代に生きているといわれて久しい。メディアリテラシーという言葉もあるように、情報に踊らされることなく自分自身で見聞きし、解釈をすることが重要である。西アジアで実際に何がおきているのか、それを正しく判断することは現代社会を生き抜くスキルにもつながると思う。

人間は過去を知ることで現在を理解し、未来を予測することができるとはよくいわれる。世界的ベストセラー、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』（日本語版は柴田裕之訳　河出書房新社　2016 年）は、私たち人類の来た道を新たな視点から解釈して多くの読者を獲得した。これは現代社会がどのようにして形成され、そして今後どうなっていくのか、現代社会をとりまくさまざまな要素、例えば戦争、テロ、貧困、犯罪、異常気象、自然災害、疫病、そして近年盛んに議論されるポピュリズム、などが人類の未来に漠然とした不安をもたらしている。この不安が、人間はどのような歴史を歩んできたのか、また未来にむけてどのような選択、決断をすべきなのかを私たちにといかけている。上述の書籍に代表される「歴史物」が売れている一つの要因は、この不安なのかもし

れない。

西アジアの歴史には、人間の希望・幸福・英知・先端技術だけでなく、人類の「宿痾（しゅくあ）」とされる戦争、民族・宗教闘争、疫病、自然破壊など現代社会と比較できうる事象を数多くみることができる。そのことが西アジアの文化遺産を歴史の「証人」として浮かび上がらせてくれるのである。

西アジア考古学・文化遺産セミナー

私の現在のフィールドワークは、レバノンとイラク・クルディスタンで展開されているが、この2つの地域に関して昨年度2回の「西アジア考古学・文化遺産セミナー」を本学で開催した。第1回は、2018年10月19日に本学人文学部、大学院国際人間学研究科、および人間力創成総合教育センターとの共催でおこなわれた「レバノン・シリアの考古学研究最前線－学術調査と文化遺産学の視点から－」である。このセミナーでは、私のレバノンでの共同研究者であるレバノン国立大学のJeanine Abdul Massih教授をお招きし、彼女のレバノン（世界遺産・バールベック遺跡）とシリア（キュロス遺跡）における考古学調査の成果についてお話しいただいた。

レバノンは中東の小国（岐阜県ほどの大きさ）であるが、5つの世界遺産をもち、沿岸部と山岳地帯に分かれていて、「スキーとの海水浴が同時にできる」高低差をもつ国として知られる。その反面、1975年から1990年にかけて内戦状態にあり、かつて「中東のパリ」と言われた首都ベイルートは大きな被害をうけた。内戦終結から30年ほどへた現在、レバノンは復興への道を歩んでいる。

しかし、復興による建設や開発に伴い、多くの遺跡が破壊の危機にさらされている。遺跡は一度失われると二度ともとにはもどらない。失われる遺跡を救い出し、レバノンのダイナミックな歴史を復元するため、レバノンでの考古学プロジェクトは2014年に始まった。現在はベカー高原南部の考古学踏査に加えて、2018年からはフェニキア文化の港町であるバトルーン遺跡の発掘調査を実施している（図1）。現在、レバノンで活動している日本の考古学調査は、中部大学とレバノン大学の合同調査が唯一のものである。今後ともレバノンの文化遺産保護のため活動を継続してゆきたいと考えている。

また、2018年12月14日には、第2回セミナーとして「イラク・クルディスタンにおける文化遺産の最前線－スレイマニヤ文化財局・博物館の若手専門家を迎えて－」を本学と文化庁の共催で開催した。これは本学が文化庁から委託業務として実施した「イラク・クルディスタン自治区における文化遺産の保護と活用に関する国際貢献事業」の一環としておこなわれたものである。セミナーでは、Rawa K. Salih氏（文化財局職員）とPshtiwan L. Ahmed氏（博物館職員）にスレイマイヤ県での文化遺産活動について報告していただいた（図2）。参加した学生・教職員・一般聴衆の中からは、「クルディスタン地域が、思ったよりずっと安定していることを知った」、「貴重な文化遺産（遺跡）がたくさんあることがわかった」、「遺跡や博物館を守ろうとして多くの現地の人たちが奮闘していることが理解できた」などの声があった。

イラク・クルディスタンは、イラク共和国の北東部に位置し、イラクの中では例外的に治安の安定した地域である。クルド自治政府がコントロールしているこの地域では、2010年頃よりイギリス、フランス、ドイツなどの欧米の考古学調査団が続々と参入し、いまや「考古学オリンピック」の様相を呈している。この地域は、これまで政治的理由により考古学調査がほとんど行われてこなかったこともあり、学術的な「空白地帯」として学界の大きな注目をあつめているのである。私を代表とする考古学調査団は、2016年からヤシン・テペ遺跡という都市遺跡の発掘を開始し、世界最古の帝国である「新アッシリア帝国」時代（前8～7世紀）に関する大きな成果を上げている（図3）。例えば、2017年には、中庭をもつ大型邸宅とそれにともなう、「未盗掘」のレンガ墓を、2018年には楔形文字碑文をもつ青銅製首飾りを発見した。

おわりに

西アジアは、遺跡の宝庫といわれる。それは換言すれば人類の歩みを教えてくれる貴重な場所である。また、考古学調査で重要なのは現地との人間関係である。今後ともレバノンとイラク･クルディスタンの活動を通して、現地とのつながりを大切にしながら、学界のみならず人類の歴史の復元に貢献してゆきたい。またこの活動が西アジアの文化遺産の重要性を日本の人々に伝えることになれば望外の幸せに思う。

図1：レバノンのバトルーン遺跡の調査風景

図2：第2回西アジア考古学・文化遺産セミナー（イラク・クルディスタン）の様子

図3：イラク・クルディスタンで調査をしているヤシン・テペ遺跡。後方がアクロポリスの丘で、手前が「下の町」

Profile

国際人間学研究科　歴史学・地理学専攻　2017 年度博士前期課程修了

横 地 佑 紀 (YOKOCHI Yuki)

1994年愛知県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（歴史学・地理学専攻）博士前期課程修了。専攻は日本・中国近代外交史。修士研究では、義和団事件と列強の中国政策に関する研究を行った。大学院修了後は、自身の研究テーマとして扱った中国への理解を深めることを目的として、中国への1年間の語学留学を行った。留学先は、中国の首都北京市内に存在する北京語言大学で、外国人向けに中国語教育を施すことを専門とした大学である。

From abroad

中国留学―北京語言大学での1年間―

はじめに

筆者は、2018 年 2 月 28 日から 2019 年 1 月 15 日までの約 1 年間、中国北京に存在する北京語言大学での中国語習得を目的とした語学留学を行った。今回の語学留学は、学部および大学院と中国に関連する歴史研究を行い、中国語で記された史料を用いつつも、それまで体系的な中国語教育を受けていなかった筆者が、自身が研究の対象とした中国への理解を深めることを目的として決定したものであった。筆者の留学した北京語言大学は、北京市海淀区に存在する語学系国立大学であり、中国教育部直属の国家重点大学の 1 つとして指定されている大学である。中国国内で唯一、外国人に対する中国語と中国文化の教育を主目的としている大学であり、150 以上の国と地域からの留学生を受け入れた実績があるなど、中国国内でも特に留学生の受け入れ体制の充実した大学の 1 つである。

北京語言大学での中国語学習

中国大陸本土での語学留学の形式は、留学生への語学教育を実施している一般の大学へと留学するものが主流であって、筆者もこの形式で北京語言大学に留学した。北京語言大学では、複数の期間の留学コースを開講しているが、筆者は 1 年間のコースを選択した。

筆者は前述した通り、渡航以前は中国語の習熟度がほぼゼロであったために、初級クラスの 1 つに振り分けられ、およそ 10 数か国出身の約 20 名のクラスメイトと共に中国語を学んだ。クラスメイトは、アジア出身者が最も多く、次いでアフリカが、他にも欧米や南米、中央アジアからの留学生もおり、また年齢も主には 20 代であったが、最年少は 19 歳、最年長は 37 歳と幅が広かった。

筆者の在籍したクラスは、中国語の学習経験の少ない、もしくは全くない留学生が振り分けられるクラスであったため、中国語の基礎中の基礎を学ぶことから始まった。当初は、筆者もクラスメイトたちも簡単な挨拶を覚えるのにも苦労する有様であったが、1 学期目の終わりの頃には、簡単な会話程度であれば、問題なく会話できるようになっていた。また 2 学期目の授業は、複数人での即興の会話劇を毎時間行うなど、より実践的な内容となっていった。そして、1 年間の留学期間が終了する頃には日常会話であれば何不自由なく行えるようになっていた。

中国での生活

北京での滞在先は北京語言大学の敷地内にある留学生専用の学生寮であったが、他にも生活に必要な設備や施設の一切が敷地内に揃っていたため、生活面での不自由さを感じることはほとんどなかった。授業が平日の午前中に固まっていたため、自由に使える時間は多く、毎週のように北京市内の観光に出かけ、また高速鉄道を利用して天津など北京近郊の都市への小旅行に出かけることもできた。

昨今、日本の報道でも度々取り上げられているように現在の中国の発展ぶりは凄まじく、一例を挙げると日本でも普及しつつあるキャッシュレス決済が中国では小さな露店にまで浸透しており、IT・ハイテク技術大国としての地位を盤石にしつつあるように感じた。

しかし、同じく報道でよく触れられている通り、情報統制の深刻化は、Google 関連のほぼ全てのサービスがブロッキングされていることや、NHK 等の外国放送が度々予告なく中断されることなどから一留学生の立場でも感じられるほどであり、習政権による権威主義体制の強化をまざまざと見せつけられた。

おわりに

生まれてからの 25 年間を日本で暮らしてきた筆者にとって、外国で暮らし、異なる国籍・文化の人々と共に生活することは初めての経験であったが、このことは筆者の価値観に多くの刺激を与え、留学に踏み切った甲斐があったと強く感じさせた。また、今回の留学はこれまでテレビやインターネットなどの媒体を介した情報のみで中国を理解してきた筆者の認識を、実際にこの目と耳で見聞きし、肌で触れることによって、よりリアルな中国へと変化させた。このように、以前よりも中国をニュートラルな視点で理解できるようになったことは留学の最大の成果であった。

Profile

内モンゴル大学モンゴル歴史学系　特聘研究員（教授）

赤 坂 恒 明（AKASAKA Tsuneaki）

1968年、千葉県野田市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。専門分野は内陸ユーラシア史。モンゴル帝国の西北部を構成した所謂「キプチャク汗国（金帳汗国）」の歴史を、ペルシア語、アラビア語、チャガタイ=テュルク語、中世ロシア語等の諸史料を用いて研究、『ジュチ裔諸政権史の研究』（風間書房、2005年）を刊行。また、前近代の日本の皇族や公家に関する学術論文も発表。

Conference

モンゴル帝国建設に至るまでのチンギス・ハン（テムジン）

2019年7月8日 大学院国際人間学研究科講演会

世界史に大きな影響を与えたモンゴル帝国の建設者チンギス・ハン（本名テムジン）の生涯、特に前半生は、井上靖の『蒼き狼』をはじめ、しばしば小説・劇画・映画等の題材に取り上げられ、日本人にも比較的、馴染みが深いものと思われる。しかし、それら文芸的創作に描かれたものと史実との間には、大きな相違がある。

その原因は、チンギス・ハンの事績を伝える四種の基本史料の中にある。それらの史料とは、モンゴル語の『元朝秘史（モンゴル秘史）』、漢文の『元史』「太祖本紀」と『聖武親征録』、ペルシア語のラシードッディーン編『集史』第一巻「モンゴル史」の「チンギス・ハン紀」である。

これらのうち、モンゴル研究者たちがチンギス・ハンの伝記を書く際に最も多く使用したのは『元朝秘史』である。そのため、チンギス・ハンに関する文芸的創作は、ほぼ例外なく『元朝秘史』の影響を受けている。いわく、テムジンの父イェスゲイは、タタル部族によって毒害された。いわく、父の死後、隷属していた民がテムジン一家のもとから一人残らず離れ去り、一家は貧窮のどん底に突き落とされた。いわく、メルキト部族に略奪された妻ボルテを取り戻すため、幼馴染の義兄弟ジャムハと、亡き父イェスゲイの義兄弟であったケレイト部族長オン・ハン（トオリル）の援軍を得て、メルキト部族を夜討ちし、月明かりの乱戦の中、テムジンは妻と再会することができた。等々。しかし、おそらく、これらはすべて史実ではない。

また、『元朝秘史』によると、テムジンが同族タイチュート氏族のタルグタイ・キリルトクに捕えられたのは青少年期であるとされるが、これも、実際には、テムジンが壮年の頃の出来事であったと考えられる。

『元朝秘史』は、年代記である他の三史料とは異なり、歴史を題材とした口誦文学的な要素が強い。また、ある特定の集団との間に起きた複数の出来事を一つにまとめ、それらを大体、年代順に並べるという叙述法を取る。

例えば、失脚したケレイト部族長オン・ハンを迎え入れて擁立し、金朝の支援下にモンゴル高原東部で勢力を拡大しつつあったテムジンと、モンゴル高原全域の反テムジン大連合との間に行われたコイテンの戦いでは、反テムジン連合側が仕掛けたジャダ術（牛馬の結石を用いて起こした暴風雪雨で敵を襲う魔術）が、逆に彼らを襲い、テムジンは戦うことなく勝利を収めた（この戦いの結果、天に支持されたと衆人より見做されたテムジンに、カリスマ性が備わった）。ところが、それにもかかわらず、『元朝秘史』では、この戦いは、同時にテムジンが毒矢に当たり重傷を負った苦戦でもあったとされ、矛盾している。これは、『元朝秘史』が、テムジン（およびオン・ハン）と反テムジン連合との間に行われた複数の戦いを、コイテンの戦い一つに集約して叙述したためである。

このように、歴史性の点で、いささか問題がある『元朝秘史』に対し、漢文・ペルシア語三史料の中核部は、同一のモンゴル語史料（現在は散佚）に基づいたと考えられ、年代記的な側面が強く、歴史性の点で、より価値が高い。

そのため、チンギス・ハンの伝記を明らかにするためには、漢文とペルシア語で書かれた三史料の記載内容を基軸にし、『元朝秘史』はあくまでも参考程度で扱わなければならない。

しかし、その一方で、三史料よりも『元朝秘史』の方が史実を伝えていると考えられる場合もある。例えば、テムジンとジャムハとの間の所謂「十三翼の戦い」である。三史料では、勝者テムジンが、敗者ジャムハ側のチノス氏族を虐殺、それに恐怖を抱いた諸集団がテムジンのもとに帰順した、とされる。一方、『元朝秘史』では、勝者ジャムハが、敗者テムジン側のチノス氏族を虐殺、ジャムハの残虐さを嫌った諸集団が続々とテムジンのもとに来帰した、とされる。これは、敗者たるテムジンの勢力が拡大したことを説明できなかった、三史料の原史料の編者が、これを「合理的」に解釈しようと試み、勝者をテムジンに改め、後に大殺戮者チンギス・ハンとなる彼の事績を過去に遡及して投影した、と考えるべきであろう。

このように、史料の比較・検討は、一筋縄にはいかないものである。

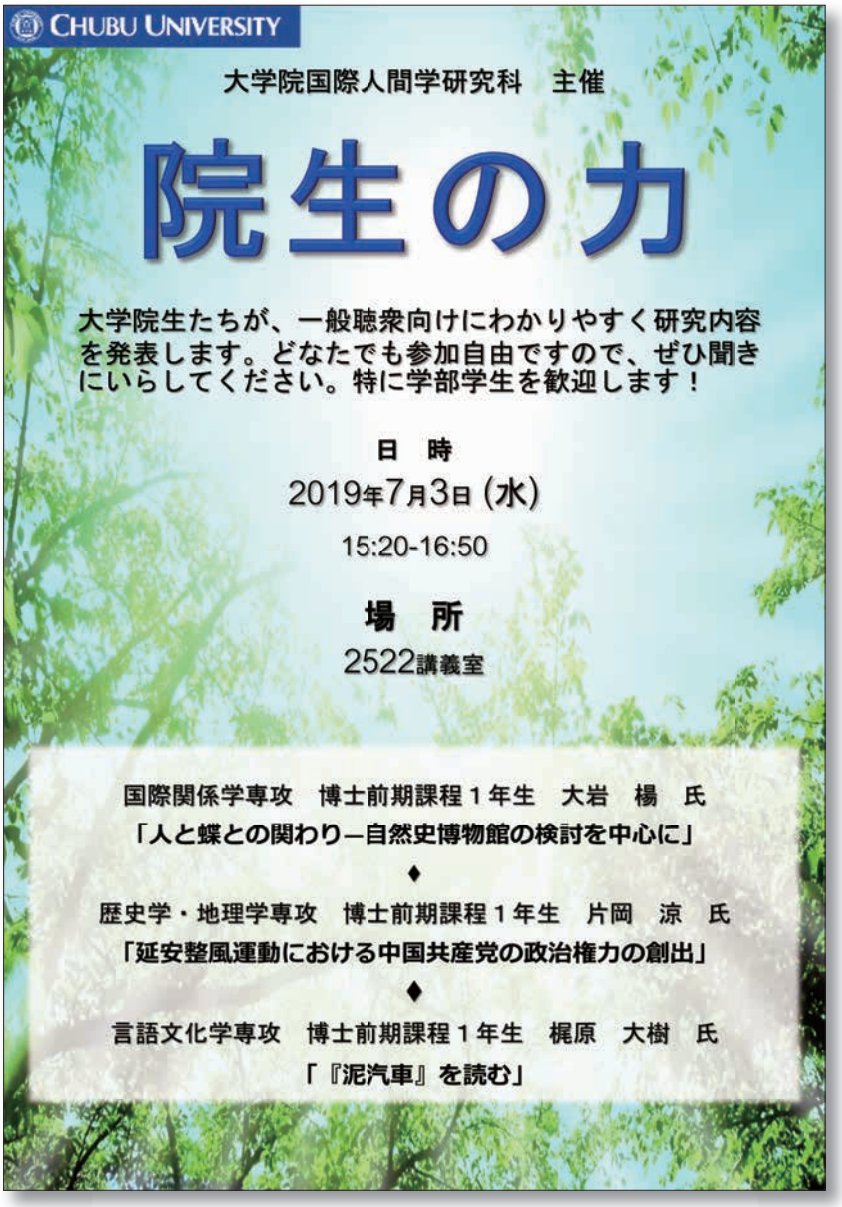
近年、チンギス・ハンとモンゴル帝国の歴史は、考古学研究の飛躍的な進展によって、新たな事実が次々と知られるようになった。しかし、古めかしい研究方法のように思われるかも知れないが、文献史料の比較・検討も依然として重要であるという事実が、以上の具体例からも十分に理解することができるであろう。

News & Record

第10回「院生の力」研究報告会を開催

第10回「院生の力」研究報告会が2019年7月3日に開催された。

今回は4月にそれぞれ国際関係学専攻、言語文化専攻、歴史学・地理学専攻の博士前期課程に進学した3名の院生が、学部卒業論文の概要を紹介するとともに、今後の方向性についての展望を語った。テーマは多種多様だが、いずれも自分の関心対象を真摯に探究していることがうかがえる発表で、これからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。発表後には指導教授をはじめ、専攻の異なる何人かの教員からもアドバイスがあり、たいへん実り多い報告会となった。



News & Record

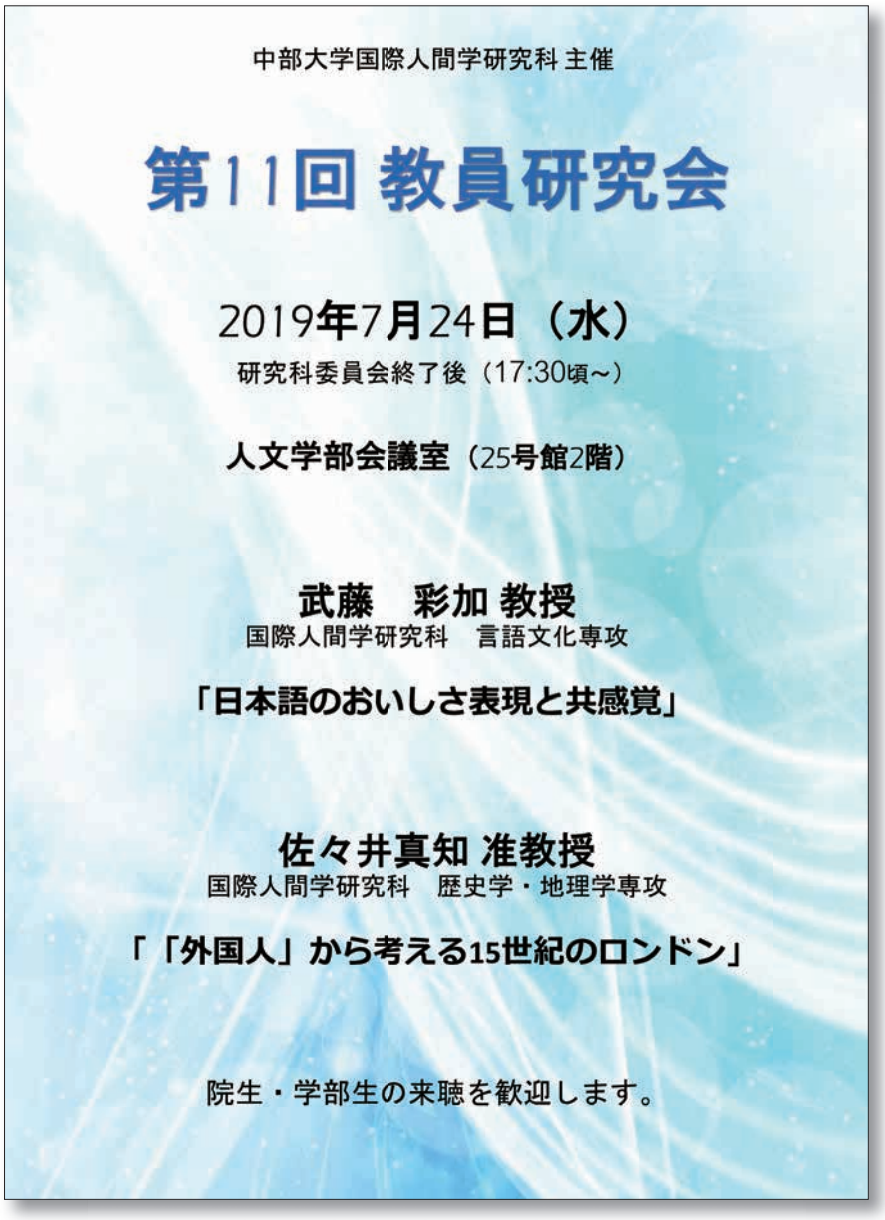
第11回教員研究会を開催

第11回教員研究会が2019年7月24日に開催された。

今回は、まず言語文化専攻の武藤彩加教授が「日本語のおいしさ表現と共感覚」と題するテーマで発表した。「やわらかい味」とか「黄色い声」のように、ある感覚を形容する表現が別の感覚の形容に用いられるケースは「共感覚的比喩」と呼ばれるが、武藤教授はその中でもとくに「おいしさ」（および「まずさ」）に関する表現をとりあげ、豊富な用例の緻密な分析と英語や韓国語など他言語との比較を通して、日本語のもつ特色をあざやかに浮かび上がらせた。

次に歴史学･地理学専攻の佐々井真知准教授が､「「外国人」から考える15世紀のロンドン」というテーマで発表した。現在のヨーロッパでは移民問題が大きな問題となっているが、佐々井准教授は15世紀のイングランドにもすでに多くの「外国人」が流入していたこと、特にロンドンの金細工師ギルドに少なからず「外国人」が含まれていたことに注目し、当時の規約集や議事録・会計簿などの資料を調査しつつ、彼らが社会にどう受け入れられていたのかを綿密に検証した。

いずれも明確な問題意識に裏付けされた興味深い研究発表であり、出席した教員との質疑応答も活発におこなわれた。



中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋をかけて、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローカルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。

国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/文化相関的科学哲学/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習
国際社会文化論専門研究演習
国際比較文明論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎（情報収集、メディア・クリティシズム）/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系/文化相関的科学哲学

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究
英語圏言語文化専門研究
日本言語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系/文化相関的科学哲学

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習
地理学専門研究演習

Chubu University Graduate School of Global Humanics

●発行：中部大学大学院国際人間学研究科
●編集者：石井洋二郎
●発行日：2019 年 11 月 1 日
●〒487−8501　愛知県春日井市松本町 1200
●中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
●電話：0568-51-4079（直通）　●ファクス：0568-52-1325
●電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
●国際人間学研究科ホームアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/